

『ガン・ホー』との遭遇とアンクル・トム  
—アメリカ映画における黒人ステレオタイプ研究 その1—

赤 尾 千 波

富山大学人文学部紀要第56号抜刷

2012年2月

# 『ガン・ホー』との遭遇とアンクル・トム

## —アメリカ映画における黒人ステレオタイプ研究 その1—

赤尾千波

### 【序：人種ステレオタイプについて】

そもそも、ステレオタイプ (stereotype) とはどんなものであろうか。ひとことでいえば「型にはまったイメージ」であり、「類型」のことである。映画に登場するステレオタイプという場合、「ネガティブに強調されたイメージ」という意味で用いられるのが一般的である。

本論では、映画におけるアフリカ系アメリカ人を中心とする黒人のステレオタイプの主だったものについて、その発生と変遷について考察したい。その前に、筆者自身の経験をふまえて、人種ステレオタイプ一般に関し、若干の考察を試みたい。

### (1) わかりやすい日本人ステレオタイプ

はじめて筆者が、映画における人種的ステレオタイプ、つまり類型化された人種イメージとはどのようなものかを実感し、理解したのは、1980年代なかば、インディアナ大学大学院に留学していたときであった。

基本的には、このことばの定義について、講義をうけ、色々な人種の人物が登場する映画作品やドキュメンタリー映像を見て納得したのであるが、その一方、現地の映画館で、「これか！」とひざを打つような、そのものずばりの映像を見る機会をも得たのである。それは、日本人ビジネスマンやエンジニアが多数登場する映画『ガン・ホー』(Gung Ho, 1986)である。

1986年といえば、この映画に登場する圧惨(アッサン)自動車株式会社のように、日本の自動車会社が、次々とアメリカ工場の建設をもくろんでいたころである。そんな時代に、日本人と日本企業の様子を面白おかしく描いたコメディ映画『ガン・ホー』は、作成された。従って、この映画に出てくる日本人像には、一部、真実味がある。最近、現実に町なかで見かけるようになった、自動車関係の日本人ビジネスマンとその家族がモデルになっているからであろう。

しかし、多くの部分が悪意で誇張されていることも否めない。たとえば、多くのホワイトカラーの日本人、とくに「上司」「管理職」とよばれる立場の人々の様子は変であり、コミカルに誇張されている。

かっこうは、さほど変ではない。黒っぽいスーツに身を包んでいたり、黒ぶちめがねをかけた人が多いのは、現実離れしているとはいえない。彼らの多くは短髪で、いわゆる七三分けにしている人もいるが、これも、とくにコミカルとか誇張という感じではない。つまり、現実の

日本人ビジネスマンに近い。

しかしながら、こうした人々の言動は、かなり不自然であり、可笑しい。日本にいる間のシーンも変であるが、とくに、アメリカに来てからの様子は、アメリカ人の目を通して、いかにも理解しがたい不思議な言動という感じに描かれる。

管理職どうし集まって相談しないと、なにひとつ結論を出せないし、ちょっとしたアメリカ人の質問やいやみにも自信をもって対応することができなくて、おどおどしている。かと思うと、往々にして彼らは尊大な態度をとり、一体どういう判断基準で行動したり態度を変えてくるのか、アメリカ人の観客は予想できない。(彼らはリアリスティックに描かれているわけではないので、日本人の観客もまた予想しがたいといえる。)

「変な日本人エンジニア」も多く登場する。彼らもまた、格好は、さほど「日本人離れ」しているわけではない。工場を着ていそうな衣類か白衣をまとっている。しかし、その態度は、あまりに堅苦しく、戯画的である。傲慢な上司にひれ伏すような態度の彼らは、上司の指示なしに動いてはいけないと思いで、結果として、アメリカ人労働者にばかにされ、彼らとのあいだに溝ができていく様子が描かれるが、いかにも誇張されていて、可笑しい。

では、女性はどうかであろうか。この映画は、企業戦士とよばれた80年代なかばのサラリーマン男性の働くシーンが多く、日本人女性の登場人物は少ない。当時は、女性でエグゼクティブになる日本人は少なかったため、このあたりは、皮肉ではあるが、現実的といえるかもしれない。

一方、日本から派遣された工場長の妻がときどき登場するが、その様子は、仕事のストレスを家庭内に持ち込む、亭主関白な夫にかしづくよりほかどうしようもない「かわいそうな日本人妻」という感じである。ちなみに、このような気の毒な日本人女性のイメージは、第二次世界大戦中のアメリカのプロパガンダ映画のなかにも登場した。その意図は、犠牲者である日本女性たちのためにも日本軍を打ち破るのが正義なのだ、というスローガンを示し、アメリカ兵を鼓舞することにあつた。この映画でも、女性は非常に似たスタンスで描かれる。

さて、この妻は、ふだん自宅で和服を着て髪を結い上げているが、なぜ和服姿なのか——それは、現実の世界で白人と同じかっこうをして生活している日系人女性と「日本からきた企業戦士の妻」を、映画の画面のなかで描き分けるのに、一番手軽で便利な方法であつたからだと思われる。現実的に日本で毎日、主婦が着物姿で家事をしているかどうかは、この際まったく重要ではないのである。

このように、女性も男性も、日本人キャラクターは大なり小なり「変」であり、その多くが笑いのめすような視線で見つめられ、描かれているのであるが、その一方で、主人公をはじめとするアメリカ人の登場人物は、労働者や会社員もふくめ、ほとんどが「まとも」な人物として、リアリスティックに描かれている。

たしかに彼らのなかには、性格のよいものもいるし、悪いものも、なまけるものもいる。日本人に偏見があるものも、理解しようと手をさしのべるものもいる。いずれにせよ、個性がそれぞれにあるのである。また、なぜそのような態度になったのかの理由は、日本人に比べればはるかに具体的に示される。たとえば、「なまけるようになったのは、日本人経営者のやり方に反感をおぼえているからである」というように、観客の理解と同情をさそうような理由が示されるのである。

一方、日本人がわの事情は、アメリカ人ほどには示されない。日本人たちの言動は、終始なぞであり、異国から来た「他者」（ストレインジャー）の行動そのものである。

この作品のポイントは、全体主義的で、従順さと勤勉さを発揮して生産性アップに命をかけるような「不思議な日本人」たちと、「自分が作った自動車」「個性を生かした働き方」ということにこだわるアメリカ人のやり方のどちらが「正しいか」を競うところである。日本人のように滅私奉公的に働けば、生産率はあがる。しかし、アメリカ人労働者たちがいうような、「手作り感覚」のマイペースで車を作ることはできない。また、アメリカ人労働者が求めるような、サービス残業なし、というような労働条件は確保されない。結末はどうなるのであろうか。

結局、この映画は、管理職の日本人が、アメリカ的な考え方が自然で正しいと「目覚める」のをきっかけに、アメリカ人がわも歩み寄りを見せ、最後には日本人社長が登場して、双方のがんばりに感動して昇給を約束して終わる。全員が仲良くなって、ハッピーエンディングとなるのだが、基本的に、現実味を欠いたエンディングである。また、日本人の観客としては、後味がよいとはいえない。

さて、実際に映画館でこの映画を見たときに話をもどしたい。筆者を含む日本人留学生たちは、「変な日本人像」が提示されるたびに苦笑するとともに、非常に腹立たしくも感じた。とくに、大手自動車メーカーからの企業派遣留学生の人々は、あきらかに不愉快そうであり、ユーモラスな場面も、無言で見ていた。自分たちが誤解され、いわゆる「上から目線」で描かれていることを残念に思う様子でもあった。

一方、アメリカ人の観客は、日本人が変なことをする場面で大いに笑い、楽しんでいるようであった。その姿は、なんとなく、普段のうっぷんを晴らし、溜飲を下げている姿のようにも見えた。そしてこのときに、筆者は、人種ステレオタイプというものがなぜ出現するかを、直感的に察したのである。

日本人であれだれであれ、対象となるものを自分より「下に見る」ことにより、相手に対する劣等感を払拭しようとする姿勢、それがステレオタイプのイメージを作り上げ、また観賞するという行為の根本にあるのではないだろうか。1980年代後半といえば、日本製の車や家電製品は、アメリカ社会にとけこみ、ロックフェラー・センターのようなランド・マーク的存在までもが日本企業に買収されるような時代であった。「日本人のほうが、自分たちより優れ

ているのではないか。このまま行くと、国全体がのっとられるのではないか。」という疑念が、アメリカ人一般のこころの底に渦巻いていても不思議はない。

そしてそのとき、「日本人というものは、実は恐れるに足りない」とか、「やはりアメリカ流がよいということは、時間をかければ日本人もわかるものなのだ」というふうに感じさせてくれる『ガン・ホー』のような作品は、一服の清涼剤、または笑いによって心を落ち着かせてくれる精神安定剤——映画を見ている間だけ効力を発揮する——であったのだろうと思われる。

映画館を出るとき、アメリカ人の客が、私たち日本人も見ていたことを知ってどのような態度をとったかは、記憶にない。ただ、はっきり覚えているのは、自分たち日本人が、非常に不快な気分であったことと、ただ黙って映画館を後にすることしかできないことに対するふがない思いである。人種ステレオタイプとは、描かれているほうの人種に属する人々——『ガン・ホー』においては、日本人たち——を傷つけるもの、とも定義づけられる。

描くほうは「悪気ではない」「楽しいからいいじゃないか、ユーモアだよ」などと言うかもしれない。しかし、セクシャル・ハラスメントと同じように、やられたほうが「不愉快である」と強く感じれば、そこには、確実に問題があるのである。

『ガン・ホー』ほどではないにせよ、日本人を劣等な存在と見なして描く映画作品は、アメリカには少なくない。そして、日本人像に限っていえば、そのことは、留学して講義を受けたりせずとも、見ればおのずからわかる。なぜなら、そこに描かれているのが、自分たち日本人に似て非なる姿であるからである。

では、これが、アフリカ系アメリカ人やロシア人であるとすると、どうであろうか。典型的ステレオタイプとはどんなものかも知らないし、現実の彼らのことも自国民ほどには知らないため、ステレオタイプなのかりアリスティックなのか、判断がつきにくいといえよう。筆者は留学中に、もっとも分かりにくいステレオタイプは、日本人以外のステレオタイプ、なかでも黒人のステレオタイプであると思った。一つの国のなかに、かつて奴隷として強制連行されてきた人々の子孫と、連行してきた、いわば犯罪者の子孫とが同居するという特殊なシチュエーションに根ざすものであることも、黒人ステレオタイプ、黒人に対する偏見の理解を難しいものになっていると思う。

帰国後、筆者は大学教員となり、映画や文学における人種ステレオタイプについて研究をすすめ、講義を続けて、すでに20年以上がたつ。そうしたなかで、やはり、自分をふくめ、だれにとっても分かりやすい例は日本人ステレオタイプであり、分かりにくいのは黒人ステレオタイプであると実感する。

このことは、大学の講義、演習はもちろん、公開講座においても同様である。たとえば、

1996年度富山大学に着任した筆者が、人文学部公開講座で、「アメリカ人の人種観——映画を中心として」と題して、アメリカ映画に登場するいろいろな人種イメージについて、映像資料を用いて説明したときも、もっとも反応があり、「理解できた」という感想が寄せられたのは、黒人その他のステレオタイプではなく、日本人のステレオタイプであった。「こんなふうにいまだに見られているのか」という驚愕の声があがったことは、いまでも記憶に新しい。

大学の卒業研究（卒論）においても、映画における人種ステレオタイプ研究の分野では、日本人ステレオタイプに注目したものが圧倒的に多い。<sup>1)</sup> 講義や演習では、映画や音楽のプロモーション・ビデオなどについて解説したり、どこが典型的で、描かれるがわの人間の気持ちをどのように傷つけるのかについて学生に口頭発表してもらい、討論したりするのであるが、やはり、日本人とそれ以外とでは、受講者の理解度と興味には格段の違いがあるように思われる。

なかでも、アフリカ系アメリカ人のイメージとしては、ラッパーやスポーツ選手など、「かっこいい」イメージが定着しており、そうしたイメージがなぜ、ときに黒人自身にとって不愉快なのか、なぜ非常識とされているのか、理解しがたいように見受けられる。

## (2) アフリカン・アメリカンのステレオタイプの発生

ここまで、筆者がいかにして人種ステレオタイプとその研究に興味を抱くにいったかを述べた。また、一般の日本人にとって、日本人ステレオタイプの理解にくらべて他の人種ステレオタイプの理解は難しいことについてふれた。

続いて、本節では、黒人ステレオタイプの解説へと論を進めたい。本論の目的は、日本人にとって理解がむずかしい人種ステレオタイプのひとつ、黒人ステレオタイプについて、映画作品に登場するものを中心に解説・分析していくことにある。

では、アメリカ映画における黒人の類型的イメージはいつどのようにして誕生したのであろうか——それは、20世紀初頭、映画産業誕生のころにまでさかのぼることができる。これらのステレオタイプは、もともと「ミンストレル・ショー」(Minstrel Show) とよばれる寸劇や、白人を主人公とする文学作品における引き立て役の黒人キャラクターを映画に応用したものであった。

ごく初期の映画作品、たとえば発明王として知られるトーマス・エディソン (Thomas Edison) による作品『ウォーターメロン・コンテスト』(The Watermelon Contest, 1896) とか、『サンボとアUNT・ジャマイマ』(Sambo and Aunt Jemima, 1897) のなかに、すでにネガティブに誇張された黒人の人物は登場するのである。

ときがたつと、映画における黒人ステレオタイプの原型はいくつかに分類できるようになってくる。本論では、主だったイメージのうちの一つ、アンクル・トム (Uncle Tom) のステレ

オタイプに注目し、考察していきたい。

### 【アンクル・トム (Uncle Tom または Tom)】

アンクル・トム (トムじいや) は、奴隷制度廃止以前に著されたハリエット・ビーチャー・ストー夫人 (Harriet Beecher Stowe) の小説『アンクル・トムの小屋』 (Uncle Tom's Cabin, 1852) に出てくる黒人奴隷である。この作品はのちに何度か演劇化され、映画化もされた。映画版の最初のもは 1903 年のエドウィン・S. ポーター (Edwin S. Porter) 監督による 12 分の作品である。

映画のトムのイメージは、ストーの小説と同じく、「命がけて白人所有者 (master とよばれるが、奴隷たちは massa とよぶ) につくす善良なる男性奴隷または使用人」である。また、トムは力が強く男性的な外見であるが、白人女性に性的関心をいだくのは「めっそもない」と考えるようなへりくだった人物である。非常に男性的だが性的ニュアンスはゼロという、よく考えると「ありえない」人物といえよう。彼はまた、単純で、白人にくらべると知的レベルにおいて劣るとされる。

ストーの小説は、南部の奴隷制度の実情を知らずにいる北部の白人たちにむけて著された作品であった。執筆の究極の意図は、奴隷制度がいかに非人道的な制度であるかを、なにも知らない北部のキリスト教徒にわかりやすく示して、制度廃止論を高めることにあった。したがって、主人公をトムといういかにも善良なクリスチャンにすることは、「こんなにいい人であり、わたしたちと同じキリスト教徒なのに、人ではないような扱いをされてかわいそう」というスタンスでうったえかけることになり、大いに読者の同情を喚起した。

こう考えると、トムのような創作上のキャラクターは、奴隷制度反対運動を促進したと考えたくなるが、現実には、話は逆であったことも指摘しておきたい。この小説は例外であり、現実の社会においては、トムのようなステレオタイプは、南部の白人が奴隷制度の正当性を主張する際に利用されたのである。

つまり、「南部では、奴隷自身が現状に満足し平和に暮らしている。だから、奴隷制度は良い制度で存続すべきなのである。解放してやっても、自分の力で食べていくことのできないトムのような無能な黒人は、かえって困ってしまう」という考え方を支えたのである。

現在でも、白人に対してへりくだる黒人や、白人の決めたルールに無条件に従おうとする「優等生タイプ」の黒人のことを、「あいつはアンクル・トムだ」と言うことがある。また、“Uncle Tomming” (白人に迎合すること) のように動詞として使われることもある。そこまでこの「アンクル・トム」という人物のイメージは一般に浸透したともいえよう。

### (1) 映画のアンクル・トム

映画に登場する「アンクル・トム・タイプ」の黒人登場人物は、白人の観客にとって見ていて心地よい存在であり、人気があった。また、映画を制作するがわにとってみれば、白人客から文句が出ないという意味で、無難であった。こうしてトムは、定番の黒人キャラクターとして、多くの映画に登場することになる。

たとえば、G. W. グリフィス監督の長編映画『国民の創生』(The Birth of a Nation, 1915)にもトム風の奴隷が「忠実なしもべ(映画の字幕には“faithful soul”と示される)」役で登場する。さらに、『風と共に去りぬ』(Gone with the Wind, 1939)の黒人男性ポーク(Pork)など、さまざまな映画や小説に「召使い」(英語では servant。実際には奴隷、つまり slave)役で登場した。

アンクル・トムのキャラクターとして、現代の映画に登場するものとしては、たとえば『フライド・グリーン・トマト』(Fried Green Tomatoes, 1991)のビッグ・ジョージ(Big George)や、『ドライビング・ミス・デイジー』(Driving Miss Daisy, 1989)の黒人運転手、『最高の人生の見つけ方』(The Bucket List, 2007)でモーガン・フリーマン(Morgan Freeman)が演じたガン患者などがあげられよう。

初期の映画では、アンクル・トムおよびこれに似た人物は、白人の「ご主人様」と農園生活以外なにも知らない「永遠のこども」のような、幼稚なキャラクターとして画一的に描かれた。しかし、現代の映画に出てくるアンクル・トム(的人物)は、ときにはおおかえ運転手、ときには大学教育を受けた入院患者といったように、バラエティがある。ただ、白人主人公——多くの場合、不幸な立場にあり、自信喪失している——を無私のまごころで支える引き立て役、わき役であることは共通する。

### (2) アニメのアンクル・トム

アンクル・トムおよびそれに類するキャラクターは、アニメ映画にも登場した。1940年代、長い「本格的な」映画のあいまに上映するモノクロ・アニメ小作品として、『アンクル・トムの小屋』や『ロビンソン・クルーソー』といった作品が作られ、人気を博した。とくに『アンクル・トムの小屋』はくりかえし上映され、『アンクル・トムのバンガロー』(Uncle Tom's Bungalow)など、よく似たタイトルのものも制作された(内容はほぼ同じ)。

アニメ映画『アンクル・トムの小屋』の黒人キャラクターは、どれもコミカルであり、「牧歌的な南部」を表すおきまりの小道具——川を行く蒸気船や、ワニなど熱帯を感じさせる動物、スイカや野菜の豊かな実り——とともに描かれた。作品のふんいきは、アナクロニスティックであり、「スワニー川」(Swanee River)などの「古きよき南部」を感じさせる音楽がこれを強調した。

トムをはじめとするキャラクターたちは、ミュージカル的に踊ったり歌ったりして観客の目



を楽しませた。のちに、このような作品は、ディズニー・アニメを中心にTVアニメの世界に引き継がれ、60年代から70年代まで人気番組として日々放送されたのである。

こうしたアニメの最大の問題は、『アンクル・トムの小屋』を読んだことがある子どももそうでない子どもにも、「黒人とはこうしたもの、南部とはこういう感じ」というステレオタイプ化されたメッセージを植えつけてしまったことである。そして、こうしたアニメを見た子どもたちは、人種差別的であるとか、ひとを、とくに描かれている本人である黒人を傷つける侮辱的な表現であるとかを意識せず、なんの疑問もいдаかずに、戯画化された黒人の姿に親しんでいったのである。

たとえ、ストーリーの小説『アンクル・トムの小屋』を読んだ経験のあるひとでも——たとえば、筆者自身この作品を読んだことはあるが——コミカルなアニメ版を見てみると、「それはそれ、これはこれ」という妙な感覚にとらわれそうになる。アニメのキャラクターの動きや台詞はいかにも愛らしく、なんとなく、奴隷制度にもほのぼのとした側面はあったのではないか、その残酷さは、実はたいしたことでなかったかもれない、という感じがしてくるのである。このあたりが、「罪のない」はずのアニメが実は非常に罪作りという、危険なパラドックスといえるのではないであろうか。

黒人がワニや狼犬に食いつかれたりするシーンは、本来残酷であるが、楽しい音楽にのせてコミカルに描かれたために、あたかも残酷でないかのように、笑える光景として子供たちのあたまにインプットされていく。このことは問題であるといえよう。

のちに、実写版映画でもアニメでも、白人でないキャラクターや宇宙人などであれば、食いつかれようが殺されようが、それは「ひとごと」であり深刻にとらえなくてよいのだ、という傾向がアメリカ映画には出てくるのであるが、その土台、原型をこうしたアニメが築いたともいえると、筆者は考える。

転じて、現代でも、ファンタジー映画やSF映画に、アンクル・トムのイメージを投影したようなキャラクターが登場することがある。宇宙人など、人間以外の存在として登場することすらある。<sup>2)</sup>次節では、現代の映画に登場する、「新型アンクル・トム」ともいふべき人物像に注目したい。

### (3) 「超わき役」黒人——マジカル・ニグロ

2000年前後に、ハリウッド映画によく登場したアンクル・トムの亜種ともいふべきキャラクターとして、「マジカル・ニグロ」(magical negro = ふしぎな黒人)をあげることができる。彼らを簡単に定義づけるなら、「超自然的な力を発揮して、自らをなげうって白人主人公を助ける黒人わき役」ということになる。アンクル・トムは、知能の面で白人に劣ることになっているのに対し、マジカル・ニグロたちは、ときに超人的な能力を有する。<sup>3)</sup>

彼らは、しばしばSF映画、ファンタジー映画に登場した。たとえば、『グリーンマイル』(The Green Mile, 1999)の黒人死刑囚や『バガー・ヴァンスの伝説』(The Legend of Bagger Vance, 2000)のキャディーや、『天使のくれた時間』(The Family Man, 2000)のホームレス男性、『ホーリー・マン』(Holy Man, 1998)の「巡礼の男」の役がこれにあたる。時代設定、舞台設定は、作品によりさまざまである。

マジカル・ニグロには男性が圧倒的に多いが、女性の人物も存在する。『17歳のカルテ』(Girl, Interrupted, 1999)の黒人看護師や『ゴースト』(Ghost, 1999)の霊能うらない師——いづれもウーピー・ゴールドバーグ(Whoopi Goldberg)が演じた——、『マトリックス』(The Matrix, 1999)およびそのシリーズでグロリア・フォスター(Gloria Foster)が演じた人物オラクル(Oracle)、『真夜中のサバナ』(Midnight in the Garden of Good and Evil, 1997)に登場する黒人老女などである。TVシリーズ化されたスティーブン・キングの小説『ザ・スタンド』(The Stand, 1978)にもなぞの黒人女性が登場する。

ただ、これらの黒人女性キャラクターは、看護師やうらない師など、一応は仕事に従事していたり、都会のアパートに暮らしていたりと、ある程度リアリスティックに描かれているといえる。男性にくらべて「マジカル」というほど人間離れたイメージではない。

マジカル・ニグロが登場する映画は、宇宙船やモンスターが登場したりするいわゆるSF映画とはちがうが、ファンタジー的なふんいきがある。超人的な身体能力を持つ黒人や、なぞめいたアドバイスをする黒人がどこからともなく登場して人間離れた「ちから」を発揮する。そして、自分の利益をまったく無視して、白人に寄りそい、助ける。

彼らは、とくに男性のマジカル・ニグロは、単に外見や言動が不思議なだけではない。ふつうではありえないレベルの自己犠牲精神の持ち主であり、理解しがたい理由で(まるで犬が飼い主につきすように)主人公をはじめとする白人たちにつくす。すなわち、彼らはファンタジーの世界のアンクル・トムのようなものである。

## 【結び】

本論では、映画における人種ステレオタイプに注目してきた。まず、日本人にとってわかりやすい人種ステレオタイプとして、日本人自身のステレオタイプを『ガン・ホー』を例にとって説明し、続いて、日本人にとっては比較的理解しづらい人種ステレオタイプの一つである黒人ステレオタイプについての説明へと導入した。さらに、黒人ステレオタイプの代表的なものとして「アンクル・トム・タイプの人物像」に注目して検討を進めた。

アンクル・トムのキャラクターは、黒人ステレオタイプのなかでは、比較的日本人にも理解しやすいほうである。それは、幸せそうな、コミカルな、単純なキャラクターだからということが大きであろう。後に論考する他のステレオタイプにくらべ、笑ってみられる「人好

きのする」キャラクターである。一方、『ガン・ホー』の日本人たちも、何人も出るなかで共通するポイントは、どこか笑えるキャラクターであるということである。

トムも日本人も、共通して、白人の登場人物、とくに主人公よりはなんらかの意味で劣っていて、引き立て役になっていることが多い、ということも指摘できよう。結局、こうした映画のなかのコミカルな非白人キャラクターたちは、アメリカという国が、白人たちが取ってきた非白人に対する態度について、肯定的な目でみようとしていることを示すものだといえよう。つまり、奴隷制度は、よい制度とまではいえないまでも、トムのような人物は恩恵を蒙って、その結果、「明るく楽しく」白人につくす人生に満足していたので、少しはよい部分もあった、という詭弁を正当化するのであろう。また、日本人サラリーマンは、最後には自分たちが「変」であったことに気づき、みんな仲良しになって終わるので、やはり白人がわの考え方こそ「ふつう」で正しかったのだ、という結論になるのである。

トムのステレオタイプと、『ガン・ホー』のようなコメディ映画に共通する危険性は、非常に深刻な、不愉快なテーマを抱えこんでいるにもかかわらず、ユーモラスに、笑いに包んで粉飾しようとする点である。この意味で、コミカルな要素、笑いの要素を全面に出したトムのようなキャラクターや、『ガン・ホー』のような作品は、ほかのステレオタイプ——たとえば、黒人といえば麻薬ディーラーかスポーツ選手しか出ないような作品——にくらべ、その危険性を指摘することが難しく、いわば「たちが悪い」のである。

アメリカ映画における黒人ステレオタイプは、「笑える」粉飾型のものばかりではない。もっと込みいって難解なものが、実は多い。これらについての考察は、今後、論考を進めていきたい。

## 注

1. 筆者が指導した学生の卒業研究（卒論）の一部は、本人の許可を得て、筆者ホームページに掲載。
2. 非白人ステレオタイプの宇宙人像への投影に焦点をあてた拙論としては、“A Study of *Star Wars* Series Part 1 — Mammy, Mulatto, and Hot Mama: Images of Female Aliens in the *Star Wars* Movies” (2004年『富山大学文学部紀要第40号』, 211-225頁), “The Phantom Menace of ‘Specieist’ Characterization — *Star Wars* Studies Part 2” (2005年『富山大学文学部紀要第43号』, 75-90頁)がある。
3. マジカル・ニグロをはじめとする、2000年当時のアメリカ映画に登場する黒人キャラクターについては、『21世紀アメリカ社会を知るための67章』（赤尾千波他編著、明石書店、2002年）所収の拙論「多様化するハリウッド映画の黒人像——「超」脇役、ブルジョア、正統派ヒーロー」と、『黒人研究の世界』（黒人研究会編、青磁書房、2004年）所収の拙論「多様化するハリウッド映画の黒人像」（235-244頁）を参照。

## 【参考文献一覧】

- Bogle, Donald. *Toms, Coons, Mulattoes, Mammies, and Bucks: An Interpretive History of Blacks in American Films*. Rev. ed. New York: Continuum, 1993.
- Dower, John W. *War without Mercy: Race and Power in the Pacific War*. New York: Pantheon, 1986.
- Gun Ho*. Executive prod./dir. Ron Howard. Paramount Pictures, 1986.
- Takezawa, Yasuko. ed. *Racial Representations in Asia*. Kyoto: Kyoto Univ. Press, 2011.
- 村上由見子著、『イエロー・フェイス——ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』（朝日出版社、1993年）